高度な視力障害を呈した小児鼻性眼窩骨膜下膿瘍の１例

高宮優子　　月舘利治　　春名眞一
獨協医科大学耳鼻咽喉科

小児の副鼻腔炎は日常しばしば遭遇する疾患であり，近年の抗菌薬の進歩により多くは保存的療法のみで良好な経過をたどる．しかし，中には眼窩へ波及し眼窩蜂窩織炎をはじめ鼻性眼窩内合併症を引き起こすような重症例も少なからず存在する．重症例では眼球突出，眼球運動障害，複視などをきたすことがあるため，早期診断，早期治療が重要である．小児での報告は少ないが，視力障害をきたす症例もあり，さらに迅速な対応が必要となる．

我々は，副鼻腔炎による眼窩骨膜下膿瘍のため高度な視力障害をきたした症例に対し，早期に内視鏡下鼻副鼻腔手術を施行することにより，術後視力が回復し良好な経過を得られたので報告する．

症例は９歳，男児．平成20年３月上旬から感冒症状の軽快増悪を繰り返していた．４月１日高熱のため近医小児科受診し投薬を受けたが，４月２日左眼瞼腫張が出現し，３日には急激に左視力障害，眼球突出，開眼不能，眼球運動障害，複視が出現したため，当院を受診した．初診時，視力は指数弁まで低下しており，CTにて左汎副鼻腔炎，左眼窩内側下方に膿瘍形成を認めたため，同日，左内視鏡下鼻内副鼻腔手術を施行．術後，眼瞼腫張，眼球運動障害は数日で消失，視力も徐々に改善し，術後２ヶ月でほぼ正常レベルまで回復している．